ストラヴィーンスキイとロシア・バレエ

ストラヴィーンスキイ，イーゴリ　Stravinsky, Igor（1882-1971）

ロシアの作曲家。1934年にフランス、45年にアメリカ国籍を得る。その生涯は波乱に満ちており、その音楽もまた、数度にわたって変遷を遂げ、そのつど人々を驚かせた。しかし、今になって顧みると、生涯の作品は内的一貫性を示している。1882年から1910年までの初期の時代はロシアで過ごし、同国の年長の音楽家の影響を受けた。10年から14年にかけては、国際的活動を開始した時期で、ディアーギレフのロシア・バレエ団と＜火の鳥＞＜ペトルーシュカ＞＜春の祭典＞を初演した。［ニューグローブ音楽事典］

★　『私の人生の年代記　ストラヴィンスキー自伝　／　笠羽英子訳』より

〈1909年　火の鳥の委嘱〉

サンクト・ペテルブルグに着いたばかりのディアギレフが、1910年春に予定された、パリのオペラ座におけるバレエ・リュス[ロシア・バレエ団]の公演のため、『火の鳥』の音楽を書いてくれないかと私に打診してきたのだった。それがはっきりと期限の定まった委嘱作だということにたじろぎ、また遅れずに仕上げられないのではないかと心配しながらも—私にはいまだ自分の力がわからなかった—　、私は引き受けた。提案は自尊心をくすぐるものだった。自分の世代の音楽家たちのなかから自分が選ばれ、その方面では巨匠と見なされる慣わしだった人物と並んで、重要な事業に協力させてもらえたのだ。

ディアギレフ　Dyagilev（Diaghilev), Sergey Pavlovich (1872-1929)

ロシアのバレエ興行主。〈バレエ・リュッス〉の主宰者。1899年—1904年に美術雑誌「芸術世界」を刊行。1906年にロシア美術展、翌1907年に音楽会をパリで開催し、ロシア芸術を西欧に紹介する。1909年マリインスキー劇場のカルサビナ、ニジンスキー、フォーキンなどの俊英たちを集めて、〈バレエ・リュッス〉の旗揚げ公演をパリで行った。以後20年間、このバレエ団は欧米各地で公演を行い、作曲家ストラビンスキー、オーリック、サティ、画家L.バクスト、A. ブノア、ドラン、ピカソ、コクトーらの協力を得て、舞踊、音楽、美術が一体となったバレエを創造し、20世紀のバレエ復興をもたらした。[マイペディア]

バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）

ディアギレフが主宰したバレエ団。ロシア・バレエ団ともいう。ニジンスキーをはじめとするペテルブルグのマリインスキー劇場のすぐれたダンサーたちを結集し、1909年パリのシャトレ座で旗揚げ公演。〈薔薇の精〉〈ペトルーシカ〉〈春の祭典〉などモダン・バレエの傑作を数多く生み出した。フォーキン、マシン、バランチンなどの有能な振付家、ストラビンスキーらの新進作曲家、L. バクスト、ピカソ、ルオーなどの一流の画家が参加、音楽、美術、舞踊が一体になった総合芸術としてのバレエを具現化、当時の芸術界に大きな衝撃を与えた。・・・1929年ディアギレフは保養先のベニスで亡くなり、その死とともに解散。[マイペディア]

マリインスキー劇場

サンクト・ペテルブルグにあるロシアの劇場。ソ連時代は、キーロフ記念レニングラード国立オペラ・バレエ劇場（通称キーロフ劇場）として知られた。[マイペディア]

私がディアギレフの委嘱を受けたころ、バレエはフォーキンという新進バレエ振付師の登場、およびその才能と瑞々しさに溢れた一群の芸術家たち（パヴロヴァ、カルサヴィーナ、ニジンスキー）の出現のおかげで大きな変化を見たばかりだった。古典バレエやその偉大な巨匠マリウス・プティパに対して私が抱いていた崇拝の念にもかかわらず、私が当時までに目にしたフォーキンの二つのバレエ『イーゴリ公の踊り』や『カルナヴァル』のような演し物の光景が与える陶酔感に私は逆えなかった。そうしたものすべては私の心をとても惹きつけ、私が閉じこもっていた狭いサークルから抜け出し、私がずいぶん前から魅了されていたディアギレフを中心人物とした進歩的で活動的な芸術家グループに加わる機会を急いで掴むよう私を駆り立てた。

フォーキン Fokine, Mikhail Mikhailovich（1880-1942）

ロシアの舞踊家、振付家。のちにはミシェルMichel Fokineと名のる。ペテルブルグに生まれ、1898年帝室舞踊学校を卒業、マリインスキー劇場バレエ団に入団。早くから振付に興味をもち、美術や音楽，演劇なども勉強して、総合芸術としてのバレエの創造をめざす。1907年パブロワのために「瀕死の白鳥」を創作。この作品は既成の名曲（サン・サーンス曲の「白鳥」）を用いるなど、従来のバレエ作品とは一線を画すものであった。新しい芸術の創造をめざしていたディアギレフは〈バレエ・リュッス〉の首席振付者としてフォーキンを迎え，1909年―1912年、1914年のバレエ・リュッスの演目のほとんどはフォーキンの作品で占められた。作風は演劇性を重んじ，主題に即した衣装や美術を用い、場合によってはポアント(爪先立ち)も使わない革新的なもので、近代バレエ（モダン・バレエ）の祖ともいわれる。[マイペディア]

＜1910年　火の鳥初演　＞

スペクタクルはパリの観衆から熱狂的な喝采を得た。もちろん、私はその成功をスコアにだけ帰すつもりはさらさらない。それは同様に、画家コロヴィンの豪奢な雰囲気の舞台装置、ディアギレフ一座の芸術家たちの輝かしい演技と振付師の才能に負うものである。

1910年サティ撮影

私のパリ滞在は、ドビュッシー、ラヴェル、フロラン・シュミット、そして当時パリにいたマヌエル・デ・ファリャのような音楽界の著名人数人と知りあう機会をもたらした。『火の鳥』初演の晩、ドビュッシーが舞台の上の私に会いに来て、私の登場を祝ってくれたのを思い出す。それは、彼が世を去るまで友愛に満ちたものであり続けた私たちの交友関係の始まりだった。

＜春の祭典の主題＞

『火の鳥』の最後の数ページを書き上げつつ、ある日、まったく不意に―というのも、当時ぜんぜん違う事柄で私の頭はいっぱいだったからだ―、異教の大がかりな祭儀の光景が脳裡に浮かんだ。年老いた賢人たちが輪になって座り、春の神の慈悲を願って彼らが捧げる処女の生贄の踊りを見守っている光景である。『春の祭典』の主題だった。

＜ペトルーシュカ＞

『春の祭典』の実現は長い時間を要し、また骨の折れるものという印象だったので、それに取りかかる前に、ピアノが主要な役割を果たす管弦楽曲、つまり一種の協奏曲を書いて気晴らしをしようと私は思った。その音楽を作曲しながら、突然、吊り紐を解かれた操り人形の姿がはっきりと頭に浮かんだ。人形はその目まぐるしい悪魔のようなアルペッジョでオーケストラの忍耐を逆撫でにし、オーケストラのほうは脅かすようなファンファーレで人形に応酬するのだ。結果として恐ろしい乱闘が生じ、それは頂点に達したあと、哀れな操り人形の痛ましく哀れな敗北で終わる。その奇妙な楽曲を仕上げると、私はレマン湖のほとりを散歩しながら、何時間ものあいだ、私の音楽の性格を、したがって私の音楽中の人物の相貌を一言で表すような題名を探した。
ある日、私は小躍りして喜んだ。
ペトルーシュカ！　あらゆる縁日の、あらゆる国々の永遠の不幸なヒーロー！　まさにそれだ、私は自分の作品の題名を見つけたのだった。

＜1911年　ペトルーシュカ初演　＞

私はここで、ヴァスラフ・ニジンスキーの演じたペトルーシュカの並外れた演技に感動に満ちた敬意を表しておきたい。ニジンスキーがその役割を演じたさいの完璧さは、普段彼が秀でていた純粋に軽業師的な部分が、そのときには明瞭に劇的な駆け引き、音楽および所作によって制御されていただけにいっそう驚異的だった。

ニジンスキー　Nizhinsky, Vaclav (1889-1950)

ポーランド系のロシアの舞踊家。ペテルブルグの帝室舞踊学校在学中にマリインスキー劇場の舞台に立ち、1907年に正式のバレエ団員となる。のち、ディアギレフと知り合い、1909年〈バレエ・リュッス〉のパリ旗揚げ公演に参加。「レ・シルフィード」「シェエラザード」など多くの作品を踊り、人気を得る。特に「薔薇の精」における跳躍、「ペトルーシカ」での演劇的な役づくりは多くの伝説を生み、不世出の男性舞踊家といわれる。振付にも才能を発揮し、ドビュッシー曲の「牧神の午後」(1912年)、ストラビンスキー曲の「春の祭典」(1913年)、R. シュトラウス曲の「ティル・オイレンシュピーゲル」(1916年)などの作品がある。[マイペディア]

＜ *1913年　春の祭典初演*＞

さてここで、バレエ・リュスによってシャンゼリゼ劇場のこけら落としが行われた1913年の春におけるパリのシーズンに辿り着く。初日は『火の鳥』の再演で始まった。『春の祭典』は5月28日の晩に初演された。それが引き起こしたスキャンダルについて記すのは差し控えよう。それはあまりも語られすぎてきた。私のスコアの複雑さは多数のリハーサルを必要としたが、モントゥーはいつもの心づかいと注意をもって指揮をした。舞台面での出来栄えについては、私には判断できなかった。すぐに笑いと嘲りを生じさせた前奏の最初の数小節を耳にするや客席から立ち去ったからだ。私は憤慨した。それらの嘲笑は、最初ばらばらなものだったが、やがて支配的となり、他方、それに反対する声も上がり、すみやかに凄まじい騒ぎに変わった。

奇妙なことだが、大勢の芸術家、画家、音楽家、文学人、そして社交界のもっとも教養豊かな代表者たちの立ち会っていたゲネプロでは、万事が平穏のうちに過ぎていき、私にはこのスペクタクルがあのような憤慨を引き起こすかもしれないとはまったく予測できなかった。

1913年

火の鳥　*Zhar-ptitsa[露]　L'Oiseau de feu[仏]　Firebird[英]*

三大バレエ音楽の中で、最初の作である。ディアギレフの率いるロシア・バレエ団の公演のために依頼され、1909年の冬から翌春にかけて作曲された。1幕2場。ロシアで当時の人々に親しまれていた伝説*に基づいて、振付者のフォーキンが作曲者と相談をしながら台本を書いた。［作曲家別名曲解説ライブラリー：ストラヴィンスキー］

*ロシア民話集　上　「イワン王子と火の鳥と灰色狼の話」（W18-665）

初演：1910年、パリ、オペラ座。ピエルネ指揮、ロシア・バレエ団。火の鳥役はカルサヴィナ、イワン王子役はフォーキン、カスチェイ王役はブルガコフ。［クラシック名曲ガイド　2.管弦楽曲］

《あらすじ》
魔王カスチェイの囚われの身であるツァレーヴナ（王女）とイワン王子が恋に陥り、二人の危機を伝説の火の鳥が救う。［クラシック名曲ガイド　2.管弦楽曲］

	作曲年	出版年、出版社	編成		内容
バレエ全曲	1910		4管編成		
組曲　1911年版	1911	1912年、Schott	4管編成	5曲	①序奏/カスチェイの魔法の庭園/火の鳥の踊り　②火の鳥の嘆願　③金のリンゴとたわむれる王女たち　④王女たちのロンド　⑤カスチェイの凶悪な踊り
組曲　1919年版	1919	1920年、Chester	2管編成	5曲	①序奏/火の鳥とその踊り/火の鳥のヴァリエーション　②王女たちのロンド　③カスチェイの凶悪な踊り　④子守歌　⑤フィナーレ
組曲　1945年版	1945	1945年、Leeds	2管編成	10曲	①序奏/火の鳥とその踊り/火の鳥のヴァリエーション②パントマイムⅠ　③パ・ド・ドゥ　④パントマイムⅡ　⑤スケルツォ：王女たちの踊り　⑥パントマイムⅢ　⑦王女たちのロンド　⑧カスチェイの凶悪な踊り　⑨子守歌　⑩フィナーレ
ヴァイオリン編曲/ドゥシュキン共作	1929-32		vn,pf	3曲	①序奏と王女たちのロンド　②スケルツォ　③子守歌

［作曲家別名曲解説ライブラリー：ストラヴィンスキー］

※配付資料には譜例等も掲載しています

ペトルーシュカ　*Petrushka,　Petrouchka*

「ピアノが主体的な役割を演じるオーケストラ作品」として最初に着想された。副題は「4場のブルレスク」とあり、前作よりも民族主義的傾向が強く、風刺的、心理描写的な手腕も発揮されている。そして前作のむしろ後期ロマン派に通ずる感傷性や、リムスキー＝コルサコフの＜金鶏＞などの影響から脱し、非常に個性的になった。ブノアの協力を得て作曲者による4場からなる台本を作成。

初演：　1911年、パリのシャトレ座。ブノアの装置、フォーキンの振り付け、ロシア・バレエ団による公演（ペトルーシュカ役はニジンスキー、バレリーナ役はカルサーヴィナ）。指揮はピエール・モントゥー。［作曲家別名曲解説ライブラリー：ストラヴィンスキー］

《あらすじ》
サンクトペテルブルクの海軍省前の広場で催される謝肉祭の日。人々で賑わう見世物小屋で、道化の人形ペトルーシュカは、人形使いによって生命を与えられ、同じ仲間のバレリーナに恋をするが、彼女は黒ん坊の人形ムーア人と愛し合い、失恋したペトルーシュカはムーア人によって殺される。暗くなった見世物小屋のうえにペトルーシュカの亡霊が現れておわる。［バレエ音楽百科/小倉重夫］

	作曲年	出版年、出版社	編成	
バレエ全曲　1911年版	1911	1912年ロシア音楽出版	4管	
バレエ全曲　1947年版	1946～7	1947年、ブージー	3管	楽器法の単純化やリズム表記の整理などを含めた改訂
組曲				指揮者による抜粋
ペトルーシュカから3つの楽章	1921		pf	①ロシアの踊り②ペトルーシュカの部屋③謝肉祭の市場
「ロシアの踊り」ヴァイオリン編曲	1929		vn,pf	

［作曲家別名曲解説ライブラリー：ストラヴィンスキー］

※配付資料には譜例等も掲載しています

春の祭典　　*Vesna svyashchennaya[露]*

Le sacre du printemps[仏]　The rite of spring[英]

三大バレエの頂点を成す作品であると同時に、ストラヴィンスキーの最高傑作といわれる。原始主義(バーバリズム)の作風を典型的に示す画期的なその音楽は、二十世紀における現代音楽の出発点となり、続く世代の作曲家たちに多大な影響を与えた。［クラシック名曲ガイド　2.管弦楽曲］

初演:1913年、パリのシャンゼリゼ劇場で、ディアギレフのロシア・バレエ団によって、ニジンスキーの振付で行われた。指揮はピエール・モントゥー。［作曲家別名曲解説ライブラリー:ストラヴィンスキー］

古代ロシアの原野を舞台に、大地と太陽の神への讃美と崇拝を絵画的に描いたもので、「大地礼賛」と、太陽神イアリロに処女を捧げる「生け贄の儀式」の2部から構成されている。［バレエ音楽百科/小倉重夫］

	作曲年	出版年、出版社	
バレエ全曲　1913年版	1913	1921年、ロシア音楽出版社	
バレエ全曲　1947年版	1947	1947年、ブージー (再販　1967年)	修正版(一般に用いられる版)
ピアノ連弾版	1913	1913	

［作曲家別名曲解説ライブラリー　ストラヴィンスキー］

※配付資料には譜例等も掲載しています